2025 年 3 月 6 日

古代東アジアにおける交流　－人・物・技術・文化

主席研究員　小林 史武

【要旨】

日本列島は中国大陸・朝鮮半島と地理的に密接な関係にあり、古代より人・物・技術・文化の交流が盛んだった。特に弥生時代から飛鳥時代にかけて、渡来人が日本列島に多くのものをもたらし、日本の基礎にも取り入れられている。また、交流は一方向ではなく、日本独自の文化を朝鮮半島で見ることもできる。

本稿では、中国大陸・朝鮮半島から日本列島への渡来人との交流、渡来人がもたらした物・技術・生活様式を通じて、相互に影響しあった足跡を辿ってみたい。

＜目次＞

はじめに 2
1.　中国大陸・朝鮮半島から日本列島への渡来人との交流 2
（１）縄文時代（紀元前 11000 年～前 5 世紀）、弥生時代（前 5 世紀～後 3 世紀) 4
（２）古墳時代(3 世紀～6 世紀後半) 4
（３）飛鳥時代(593 年～710 年) 5
2.　渡来人がもたらした物・技術・生活様式 7
（１）馬 8
（２）鉄・鍛冶 9
（３）須恵器 9
（４）カマド(竈) 11
おわりに 12

本稿中に記載したデータ・数値等は、筆者が信頼できると判断した各種データに基づき作成・加工したものですが、その正確性・確実性を保証するものではありません。

はじめに

筆者は埼玉県に居住しているが、埼玉県には「高麗神社」や「高麗川」など、「高麗」のつく神社や地名がある。朝鮮半島にあった国、高麗や高句麗が連想されるが、日本海側でもない埼玉県とどのような所縁があるのか不思議に思っていた。

行田市にある「さきたま古墳群」の「稲荷山古墳」から出土した「金錯銘鉄剣」は、その銘文（115 文字）の内容から、5 世紀後半にはヤマト王権の勢力が東国まで広範囲に広がっていたことを物語っているという[1]。埼玉県も古墳時代には既に日本の表舞台に立っていたのである。

関心を持って歴史を調べていくうちに、県内の日高市・飯能市を中心とする周辺には 8 世紀に高麗郡が置かれ、高句麗から渡来してきた人々[2]を移り住まわせたこと、和光市・朝霞市・新座市・志木市周辺には新羅郡が置かれ、同じく朝鮮半島の新羅からの渡来人を住まわせたことを知った。

また、筆者は乗馬、陶芸を趣味としているが、渡来人が中国大陸、朝鮮半島から「馬」「須恵器」を日本にもたらしたことも知り、日本海を挟んだ古代の交流とその影響について考察するさらに強い動機となった。

１．中国大陸・朝鮮半島から日本列島への渡来人との交流

日本人が見る「世界地図」は、日本列島が中央にあり、太平洋が広がる東の端に南北アメリカ大陸、西にユーラシア大陸が広がり、さらに西方にヨーロッパ、その南にアフリカ大陸がある地図ではないだろうか。

筆者自身を振り返ると、欧州の世界地図では日本列島が東の果てにあり「極東」「Far East」と呼ばれることを知った時、世界観の多様性を実感したように記憶している。

一枚の地図をご覧いただきたい。

日本列島、朝鮮半島、中国大陸の南北を逆さまにした「東アジア地図」である。

この地図を見ると、日本列島が日本海によって中国大陸、朝鮮半島から隔てられた「孤立した島国」というより、海を囲んで中国大陸、朝鮮半島とつながる環の一部のようにも見える。これが、中国大陸、朝鮮半島から見た日本列島なのではないだろうか。

---

[1] 全編を通じて、巻末の【参考文献・資料】を踏まえて記述している。
[2] 本稿では、中国大陸・朝鮮半島から渡来した人々を「渡来人」と呼ぶ。

＜図表１＞ 環日本海・東アジア諸国図

出所：富山県[3]

日本列島は、中国大陸からみると東方の海上にあり、大陸と列島との橋脚にあたる場所に朝鮮半島がある。大陸・列島・半島の地理的関係から、日本列島の古代における文物・技術・文化・宗教・政治制度などは、中国大陸と朝鮮半島から大きな影響を受けており、その橋渡しをしたのは人々の往来であった。

[3] この地図は富山県が作成した地図を転載したものである。

（1）縄文時代（紀元前 11000 年～前 5 世紀）、弥生時代（前 5 世紀～後 3 世紀）

今から約 1 万年前に氷河時代は終わり、気候も温暖となり、日本列島は完全に大陸と切り離され、今日とほぼ同じ自然環境になったと考えられている。

紀元前 4 世紀頃に北部九州に新しい文化がおこり、稲作などが中国大陸から伝わり農耕社会が成立し、西日本一帯に広がって伊勢湾沿岸にまでおよび、紀元前期の終わりごろには東北地方北端に達した。縄文時代には漁労が発達し、船による大陸との交流が既にあったと見られている。

中国大陸では、紀元前 3 世紀には秦・漢という強大な統一国家があらわれ、周辺諸民族に影響を及ぼした。北部九州には中国製の銅鏡、銅剣、銅鉾など多くの副葬品が発見されており、この地域に大陸と交流し、豊かな財宝を所持する首長が出現したと考えられている。

北部九州や中国、近畿地方で発見されている弥生人骨の中には、縄文人骨との違いも見られていることから、大陸からの渡来人あるいはその子孫が含まれると考えられる。

弥生文化が大陸との交流を通じて育まれたことを物語っている。

（2）古墳時代（3 世紀～6 世紀後半）

3 世紀の邪馬台国では、女王・卑弥呼が「親魏倭王」として中国と君臣関係を結ぶ外交関係を築いた。他の各地域でも大陸と人々の往来がされていたと考えられている。

邪馬台国の所在については諸説ある中、関係が注目される奈良県桜井市の纒向（まきむく）遺跡からは韓式土器も出土し、外交を行う倭王の近くでも渡来人が活躍していた可能性がある。

博多湾を中心に漢字の使用痕跡も確認されている。博多湾が、日本海側、瀬戸内海側に点在する拠点集落ともつながる、倭人の国際交易拠点となっていたのである。

4 世紀末から 5 世紀初頭にかけ、倭国は朝鮮半島へ進出しているが、半島における鉄の安定的な入手が目的と考えられる。国力の増強のために、各国に鉄資源の確保、獲得が求められた。

朝鮮半島北部からは高句麗が南進し、百済と新羅は領土を南方に移動せざるをえなくなり、半島では支配地が激動し軍事的変化がもたらされた。その結果、南部の加耶と百済は倭国との関係を強化するようになった。

5 世紀に入っても朝鮮半島では政情不安が続き、新羅と加耶が戦乱状態となり、朝鮮半島南部の人びとが海を渡り、日本列島に移動する契機があった。

鉄と先進技術の獲得をめざした倭は百済からの援軍要請に応じ、その見返りとして工人

たちを受け入れたと考えられている。

この時期には半島から多くの手工業技術者が倭国へ渡来しており、日本は「技術革新の 5 世紀」といわれている。

6 世紀の継体朝・欽明朝の時代に百済から日本列島に派遣された諸博士らの大半は、中国南朝系の出身者で、百済に滞在ないし移住した後に朝鮮半島から海を渡って日本列島に渡来した人々である。

6 世紀前半は、主に百済から倭国へ思想・文化がもたらされた。具体的には五経博士[4]・易博士・歴博士・医博士・採薬師・楽人[5]や僧の渡来であり、文化的向上に大きな役割を担った。

一方、百済に渡航して百済官人になった倭人もいて、倭国と百済との外交交渉に倭系官人が派遣されてきていた。

継体朝を揺るがす筑紫の磐井の乱（527 年）も、首長層、渡来系の人々の越境的な関係が錯綜する中で起きた。

6 世紀半ばから 7 世紀前半は、新たに渡来した技能者がヤマト王権のもとで様々に活躍しており、ヤマト王権の支配体制全体に影響を与えていったのである。

（３）飛鳥時代（593 年～710 年）

斉明朝の時代、東アジアの大波が倭国を一気に飲み込む。

660 年、倭国と長く友好的な関係にあった百済が、唐・新羅軍の総攻撃により滅亡した。倭国は朝鮮半島に兵を差し向けたが、663 年に白村江（はくすきのえ）で大敗を喫した。

668 年、高句麗も唐・新羅軍の前に屈した。

混乱のなか、倭国には倭軍に参加した引き揚げ者とともに、百済人を中心に朝鮮半島から多くの人々も渡来した。

その数は少なく見積もっても数千人規模と考えられている。階級も王貴族層から僧・尼、その他一般の人々と幅広かった。

白村江の戦いの後、ヤマト王権は帰還者や渡来者を九州筑紫で直接把握する体制を整えていった。

現在の福岡県に営まれた太宰府の施設も、7 世紀後半に登場している。

---

[4] 五経とは儒学の根本の 5 つの経典（『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』）。
[5] 音楽を演奏する人。

唐・新羅からの攻撃に備える九州の体制強化でも、百済からの亡命者が活躍した。

博多湾から外敵を防ぐため、太宰府の西には土塁が築かれた。水城である。これら防衛施設の整備を、軍事知識・技術を持つ 百済の亡命貴族層が担ったのである。

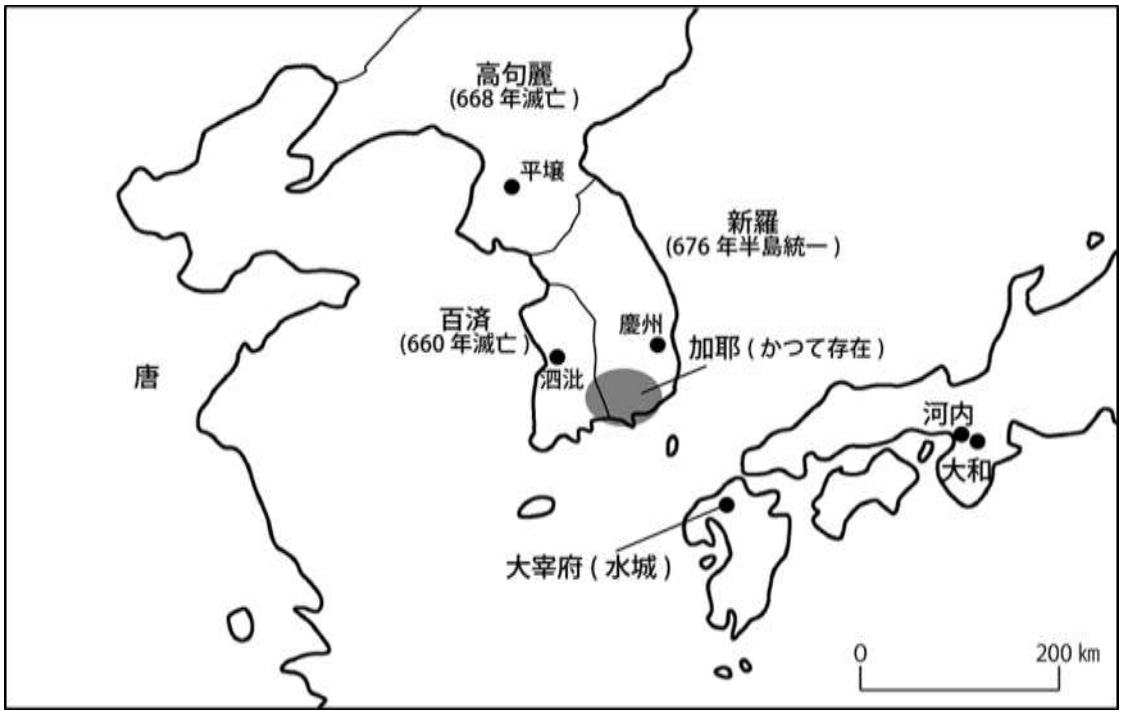
2,000 人以上もの百済人を 3 年にわたり難波で官から食料を支給した後、666 年に東国に移り住まわせた。

移住地は、畿内に住み官人などとして中央で活躍した一部を除き、近江、もしくは東国に大きく偏っており、西国にも多くの渡来人が住んだ 7 世紀前半以前と様相は大きく異なっている。確認できるのは、いずれも東海道、東山道諸国に属する、遠江・武蔵・常陸・甲斐・尾張・美濃・駿河・相模・上総・下総・下野の諸国である。

渡来人には、移住地において田が支給され、そこで戸籍につける手続きも始まった。その際、「復十年」（租税免除）の適用も開始された可能性がある。

律令的な思想と体制を意識した帰化人は、百済・高句麗滅亡後の渡来人たちを移住者として受け入れる過程で誕生したと考えられる。

＜図表２＞ ７世紀後半の東アジア



出所：筆者作成

8 世紀に入ると、百済王氏に続き、高麗王氏が登場する。
666 年、高句麗が倭国に派遣した使節の中に玄武若光という人物がいたが、若光は帰国せずそのまま帰化したと考えられており、武蔵国高麗郡に居地を移していた。
716 年、駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野の七国の高句麗人 1,799 人が移住して高麗郡が建郡された。その範囲は現在の埼玉県日高市・飯能市を中心とする一帯が想定されている。

高麗郡には高麗王氏とは別に、高句麗系の有力な「王」姓氏族が存在した。肖奈氏である。高句麗滅亡で渡来した福徳を祖とし、高麗郡建郡以前から武蔵国を新たな居地とした。
肖奈氏は、東国各地から集まる高句麗系移住民に対して首長としての役割を果たし得る特別な一族としてあったのだろう。

ヤマト王権の官人養成体制は、渡来系の人々の活躍に頼るところが大きかった。
地方では文字技能を持つ渡来系のフミヒトらが文書行政の中核を担い、彼らによって地方行政を担うべき倭系の首長層にも文字が教え伝えられていったと考えられる。

渡来の師のもと在来の渡来系氏族が世襲的な高度な技能を身につけることは、7 世紀になるとある程度広がっていた。
律令制度が唐制を踏まえて官人の養成体制を整えられたのは、こうした下地があったからだと考えられる。

2. 渡来人がもたらした物・技術・生活様式

海を渡って来た人々が、日本列島の文明に与えた影響はきわめて大きい。
鉄器や須恵器の製作、馬の飼育などの産業技術、文字や思想・文化は、中国大陸、朝鮮半島からどのように列島にもたらされ、定着していったのであろうか。

2 世紀までの日本列島で見られる朝鮮半島の文物[6]は北部九州地域に集中している。
また、朝鮮半島で見られる日本列島産の文物のほとんどは北部九州産であり、釜山周辺の金海地域を通して移入されたと考えられている。

3 世紀から朝鮮半島の文物が瀬戸内海を通じて近畿地域に入るようになり、朝鮮半島の金

[6] 本稿では、物・技術・文化などを総称して「文物」と呼ぶ。

官加耶地域では北部九州産の文物に加えて近畿の文物も出現している。

加耶地域には、産出される鉄を目当てに、朝鮮半島内からだけでなく日本列島からも人々が渡来していた。加耶地域で産出される鉄は、農耕にも戦いにも不可欠なものになっていたのである。

ヤマト王権は、渡来系集団を積極的に受け入れて新たな産業の発展を図り、大和地域には高度な技術の生産工房を、河内地域には馬生産の拠点や鉄器・須恵器の大型工房を配置していた。大和地域が政治的中枢であるヤマト王権にとって、戦略的な地域政策に基づく産業配地であったと考えられる。

各職種に分業生産システムを機能させ、渡来系工人集団が重要な役割を果たしたことで、「技術革新の時代」を迎えることができたのである。

（1）馬

朝鮮半島での戦いを経験して、日本列島でも騎馬を導入する必要性の認識が高まっていた。百済・加耶は援軍の見返りと倭の軍事力強化への期待から、馬と馬飼集団の派遣を 5 世紀以降に集中して行ったと考えられる。
馬の派遣にあたっては、飼育の知識をもった馬飼や、馬具を作る人も含めて、集団で渡来した。

馬を受け入れた最初の主要拠点は、河内平野の中央に広がる河内湖東岸から生駒山西麓までの地域（現在の寝屋川市と四条畷市・東大阪市など）で、その範囲は東西約 2 キロメートル、南北約 3 キロメートルである。そこは、大和川と淀川に通じる水運に適した土地であり、後に馬の供給センターとなる河内の牧の役割が、最初から想定されていたとみることができる。
ここでは 5 世紀から 6 世紀にかけて、馬を飼育する牧とそれに付随する集落が営まれ、6 世紀末以降には馬が物資輸送など役馬の役割を担うようになる。

日本列島への騎馬文化の伝来には、中国大陸と陸続きの朝鮮半島とは異なり、馬を船で運ぶ必要があった。繁殖用のつがいの馬と、馬の生産技術は、技術者とともに百済から船でやってきた。百済には、馬を外洋船に載せて海を渡る技術もあったのである。
馬具の製作工程は、渡来人を中心とする「工房間分業」によって、馬の生産、馬具の生産

のシステムと流通が河内の牧において成立し、各地に展開していったと考えられている。

日本列島における馬の生産の開始・定着の裏に、王権による陸上交通網の再編があったとの指摘もある。馬は軍事や交通の能力を高める。中央と地方の関係が強化される中、東国の馬は王権との交通関係を強化したであろうし、この頃から朝鮮半島へ渡るようになった倭国の馬にも東国で生産された馬が含まれていただろう。

（2）鉄・鍛冶

渡来系工人を積極的に受け入れて、地域の経済力を高めた大和の葛城地域では、金剛山麓の丘陵地帯の開発が始められ、渡来系集団の技術を活かした鍛冶生産を主要産業に取り入れた。南の吉野川ルートから原材料を受け入れやすく、必要な燃料が豊富に確保できる金剛山麓は、常時火を使う工房を営むのに適した土地として選ばれたのだろう。

地域の開発と鍛冶生産の定着・発展に、渡来人たちの知識と経験が活かされたと考えられる。

こうして整備されたのが南郷の集落である。

南郷遺跡群では、5 世紀前半頃、首長の居宅近くに高度な技術を持つ馬韓系・加耶系の渡来人が集まり住み、鍛冶や、ガラス、石製の玉などの生産にかかわっていた。

南郷工房群で必要なのは、鉄の原材料の安定供給であり、朝鮮半島南部からの人とモノ（鉄の原材料など）を確保するために、吉野川ルートが整備されたと想定される。

百済への援軍に加わった葛城襲津彦は、援軍の見返りとして倭に派遣された工人とその指導者たちや戦乱の難を逃れた渡来人を葛城に受け入れたようだ。

渡来人のもたらした技術によって鉄器生産技術も刷新され、甲冑や刀剣などの武器や先端に鉄の刃先を取り付けた鋤・鍬といった農工具などの鉄器は、首長層の主導する生産活動や軍事力を大きく向上させ、倭人首長層は、こうした生産技術を持つ渡来人を求めていった。

（3）須恵器

倭の五王の時代[7]、列島の渡来人は中国系よりも朝鮮系の人々の方が圧倒的に多かった。

---

[7] 5 世紀。中国の宋に遣使した倭国の五人の王は、讃・珍・済・興・武。

朝鮮系渡来人は、倭人首長層が共同体を支配する上で有効な技術をもたらした。

朝鮮半島南西部の全羅道と加耶の土器をルーツとする硬質で、保水性に優れた、青灰色の「須恵器」生産が、これらの地域から来た工人を中心に始まった。

縄文土器から土師器までの土器は、日本古来の技法で成形され、野焼きで作られていたため、焼成温度が低く強度があまりなかったが、須恵器は全く異なる技法を用いて成形し、穴窯を用いて 1,100 度以上の高温で強く焼き締まり、それまでの土器以上の硬度であった。

大量の燃料を必要とする須恵器生産は、良質の粘土と専用の窯、そして専門の工人集団を成長させた。須恵器の生産技術とともに、大甕を用いた発酵醸造の技術や儀礼・祭礼が朝鮮半島からもたらされたとみられている。

王権の工房は影響力を増し、現在の大阪府泉北丘陵に展開し、須恵器を生産した「陶邑窯（すえむらかま）」の技術が 5 世紀後半になると各地に拡散し、これまでの独自性を保っていた地域の須恵器生産も陶邑の影響を強く受けるようになる。

瀬戸内海地域では、岡山県総社市の「窪木薬師遺跡」、岡山市の「奥ケ谷窯跡」（金黒池東遺跡）などで、加耶系の技術系譜を持つ渡来工人の関与が確認されている。

ここは葛城勢力とともに 5 世紀のヤマト王権を支え、外交でも活躍した吉備勢力の本拠地である。

＜図表 3＞　大和・河内の馬・鉄器・須恵器 遺跡

出所：大阪府立近つ飛鳥博物館 2010「大阪湾沿岸で始まる手工業生産」
『鉄とヤマト王権　邪馬台国から百舌鳥・古市古墳群の時代へ』平成 22 年度秋季特別展

（4）カマド(竈)

5 世紀から使用が始まるカマドは、調理に便利な施設として、日本列島の人々の生活に大きな変化をもたらした。

日本列島のカマドは、朝鮮半島から弥生時代に一部伝えられ、その後 5 世紀に入って定着していったと考えられている。それ以前は炉（現在の囲炉裏のようなもの）で煮炊きを行なっていたとされている。

カマドが日本列島で伝えられた時期は、弥生時代後期、紀元後 2 世紀頃とされ、長崎県壱岐市の原の辻遺跡のものが、現時点で確認されている中では最も古い。朝鮮半島からの渡来人たちの生活の場で使用され、それが徐々に日本列島の人々に受け入れられていったと考えられている。

各地域をみてみると、畿内（ヤマト王権）を挟んで西と東とでは、5 世紀代の渡来系の人々・渡来系文化の入り方は異なっている。大きく分けると、西は「直接」、東は王権を介しての「間接」という違いがみえる。6 世紀以降には西日本においても王権を通した間接的な入り方がみえる。

西日本の各地域は地理的な位置と環境、朝鮮半島－大和・河内の交通路上にあるか、そこから外れるか、朝鮮半島との遠近などが渡来系文物の多寡に反映しているようである。

それぞれの地域に応じた金属生産（鉄、銅など）、金属器生産（武器、武具、馬具、農耕具、装身具など）、馬飼育、養蚕・桑栽培・絹糸生産・絹織物生産、船作り、港の管理、帳簿管理などに、渡来人の新しい技術は活用されたものと思われる。

山陰では、島根県松江市の意宇平野において 5 世紀前半の渡来系遺物が確認され、この地の首長の拠点に、渡来人なども居住する中核的な集落が形成されていたことが判明している。

古くから朝鮮半島との交流ルートを持つ北部九州でも、福岡県の福岡平野や県中南部の朝倉地域などで、渡来人が 5 世紀前半から様々な生産活動にかかわっていたことがわかっている。

また東日本では、5 世紀頃から渡来人の痕跡が一気に広がる。彼らは馬の生産などに関わり、王権によって移り住まわされた人々だったと推測される。

日本列島各地における渡来の技術者や文化の展開は、5 世紀半ば頃から王権の直接的な影響力が増大するのである。

おわりに

渡来人たちは、日本列島に渡って来て受け入れられ、仕事・生活をし一生を終えていった。その子孫たちは、その後も日本列島の人々と暮らし、溶け込んでいったのであろう。

渡来系文化・渡来人は、はじめは外来のものだったかもしれないが、弥生時代、古墳時代から飛鳥時代と、何度も新しくやって来る波がありそれらが重なり、日本に根づいていった。

また、田舎などの生活で今も使用しているカマドは渡来人がもたらしたものであり、須恵器などと同様に、日常生活に大きな変化を与えた。

一方で、カマドや須恵器など渡来人たちがもたらしたものは、日本の気候風土、生活様式に合わせて、受け入れ方が多様である。

渡来の文物や技術を単に受け入れるのではなく、日本の中で改良した上で受け入れていることも、日本の文化形成の特徴といえるのではないだろうか。

日本人は古代より多くのものを受け止め、風土に合わせた形に変えながら受け入れて、列島社会の中で生き抜いてきたのである。

長い歴史の中では、中国大陸・朝鮮半島からもたらされた物・技術・文化による時代ごとの変革だけでなく、日本列島の自然がもたらす環境変化も人々の生活に大きく作用した。

地震・津波・火山噴火・河川の氾濫・疫病といった自然災害もまた、積み上げた歴史を大きく揺るがす出来事であっただろう。

そうした人間が生きる上での障害を都度乗り越えながら、新しい社会を日本列島で紡いできた日本人。現代から未来もまた世界に扉を開き、交流し共鳴し合いながら新しい社会を築いていくことが、私たち日本人の姿なのであろう。

以上

【参考文献･資料】

・「渡来系移住民 半島・大陸との往来」　吉村武彦、吉川真司、川尻秋生　岩波書店
・「渡来人と帰化人」　田中史生　角川選書
・「国際交易の古代列島」　田中史生　角川選書
・「日本社会の歴史」（上）（中）（下）　網野善彦　岩波書店
・「古墳とその時代」　白石太一郎　山川出版社
・「東アジアと日本」　松本武彦、川尻秋生、吉村武彦　角川選書
・「歴博」第 195 号、202 号　国立歴史民俗博物館　(一財)歴史民俗博物館振興会
・「詳説 世界史／日本史」　山川出版社
・東京国立博物館　展示資料
・国立歴史民俗博物館　展示資料
・奈良県立橿原考古学研究所付属博物館　展示資料
・四条畷市立歴史民俗資料館　展示資料
・桜井市立埋蔵文化財センター　展示資料
・大阪府立近つ飛鳥博物館　展示資料

株式会社ＡＮＡ総合研究所
ANA STRATEGIC RESEARCH INSTITUTE CO.,LTD.

〒105-7140 東京都港区東新橋 1-5-2 汐留シティセンター
mailto　info@ana-ri.co.jp